緑のまきば

1998.No.29

日本基督教団　小金井緑町教会
東京都小金井市緑町四の一六の三三
電話　〇四二三(八一)七九六一
発行　牧師　山本圭一

辞任のことば

行き先も知らずに

（ヘブライ人への手紙一一章八～一六）

山本圭一

信仰をもって激動の人生を生き抜いた最も古い聖書の証言はアブラハムです。およそ紀元前二千年代、彼は故郷のカルデヤのウルを出発しました。唯一の動機は、信仰によって受け継ぐべき地に出て行けとの神の召しを、受けたことでした。その時、彼は神の召しに従い「行き先も知らずに」出発したのです。

ウルはペルシャ湾を遠く望み、ユーフラテス河西岸の都市で、古代の通商・政治上、重要な地位を占め、高度に発達した文化都市であったことが、この地方の遺跡発掘によって判明しています。アブラハムは、この文化都市の生活を離れ、羊や牛、ロバを飼う遊牧生活に転換しました。これは当時の人々と全く正反対の道でした。それを導いたのは、神の召しであり、それに服従した結果、行き先も知らずに旅立ってゆきました。

私たちが小金井緑町に教会の業を始めるためにやって来た時も、「行き先も知らずに」ということが根本状況としてありました。それでも福音を伝えたいという希望と喜びは不安を取り払い、次々と起こるドラマにその都度、立ち向かうことができました。

アブラハムの旅立ちは彼の決断であり、同時に彼の部族集団の決断でもありました。過酷な砂漠を集団で旅する労苦は想像を絶するものがあります。しばらく老若男女や家畜を引き連れた徒歩の旅。食料や水の不足、病人の発生、外敵の恐怖、どれ一つとっても生やさしいものではありません。やがて適当な場所を見出して天幕生活。その旅の姿は他国に宿るような仮寓と、約束の地に住む定住の繰り返しでした。その意味で私たちの生活も、仮寓と定住の位相を持っています。それは屋根の上の雀に似ています。雀はしばらく屋根に留まっていても、そこに住み着くことはできません。やがて大空に飛び立ち、また帰り来たります。そして仮寓と定住は時には分水嶺を歩くように、いずれかに転落する危険をはらんでいます。

小金井に来た当初、礼拝・集会に用いた牧師館は、古材利用のプレハブでした。亜鉛鉄板葺きでしたので「夏は暖房、冬は冷房ですね」と言われたものです。私たちは本当に感謝し満足して三十三年を過ごしました。子供たち二人もよく育ちました。土地の奉献、会堂建設、そして最後の牧師館建設と牧師のバトン・タッチ。いずれも精魂を注ぎ出す祈りと長い準備の期間が必要でした。それは「教会形成の設計図」（松永東京神学大学長）からすれば、草創期に取り組む基本的条件でした。主の業への参与でありますから、人間の小さなサイズで考えることを戒めなければなりません。多くの方の献身と祈りを覚えます。あの人、あの方たち、既に天に移された方々もあります。神はいつもバールに膝を屈めない人びとを備え、長老会の堅実な支えの中で、いくつもの山坂を越えては越えてきました。

「人は心に自分の道を考え計る、しかしその歩みを導く者は、主である」（箴言一六章九）。

私は三月三一日をもって主任担任教師を辞任し、四月一日より新進気鋭の山畑謙牧師をお迎えすることに決しました。中会的な労を真実におとり下さった東京神学大学と松永希久夫学長に満腔の謝意を表すと共に教会のかしらなる主イエスの憐れみと導きによることを信じ感謝のほかありません。

教会は混迷する現代の只中にありながら、この世から選びわかたれキリストのみ言葉と聖礼典（洗礼と聖晩餐）のもとに立つ聖なる交わりであります。教会こそ目に見えるキリストの体であります。

従って、牧師も長老・信徒も「神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、成熟した人間になる」（エフェソ四章一三）ことが目標です。しかし松永講演（九七・一・一九）に於いて覚醒的に教えられたように、その完成した姿は、たった一人イエス・キリストがそこに出現することです。キリストのお姿が緑町に立ち現れることです。そのために人間の思いや姿は消え去らねばなりません。

「わたしたちではなく、主よ。わたしたちではなく、あなたのみ名こそ、栄え輝きますように。あなたの慈しみとまことによって」（詩編一一五篇一）

至らぬ者を忍耐をもって支えて下さった皆様に只々感謝します。